
白波高校図書委員会活動記

正木 慶史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白波高校図書委員会活動記

【Nコード】

N5222Q

【作者名】

正木 慶史

【あらすじ】

うららかな陽気に包まれたとある春の日。

俺は司書室から教師が使うようなグレーの回転椅子を持ってきて、それはもうバカみたいにくるくる回っていた。

簡単に言つと、回転椅子でくるくる回る恋愛小説。

うららかな陽気に包まれたとある春の日。

俺は司書室から教師が使うようなグレーの回転椅子を持ってきて、それはもうバカみたいにくるくる回っていた。

窓から入ってくる日光と回転による三半規管へのダメージが、絶妙なハーモニーを奏でている。ぶっちゃけ気持ち悪い。その上回るたんに隣で本を読んでいる美少女Aの顔が、視界の中で線を引くので何かシニールリズムっぽい。頭の中に絵筆持った髭のおっさんが住み着いているみたいだ。記憶の固執！。

このように平日の真昼間にグルグル回っている俺だが、決して暇人なわけではない。

実際俺には貸し出し図書を返還するときの手続きという、図書委員のほぼ唯一にして絶対崇高なる仕事があるのだ。

だが最近の子供たちの読書離れは恐ろしいもので、全くといって良いほど人が来ないのだ。もはや筆舌に耐え難いほどの暇さ加減である。

お前も高校生で最近の子供だろう、という突っ込みは無視することにする。

しかし、暇こそが人生を退廃させる魔物、という箴言はまことに正しいもので、図書室にある本で、俺の食指が動く本はすべて読みつくしてしまったし、隣の読書美少女に話しかけてもおざなりな返事しか返ってこなくなってしまった。

いや、隣の相方は普段もあんまり返事してくれへんかったわー。おじさん間違えちゃった、テヘッ。

しかしただクルクル回るというのもつまらない。というか気持ち悪い

い。気を紛らす為にも俺は回りながら桂歌。の真似に励むことにした。

「一度でいいから見てみたいー。隣の美少女しゃべるとこー」

「五月蠅い。静かにして」

オオウ、あまりにも喋らないから椅子か何かだと思ってたヨー。

（皆も無口な外国人を見かけたら言ってみよう。ぶん殴られるから）

しかしこんな冗談をそのまま言うほどバカな俺ではない。

この前戯れにジヨグってみたら即座に辺りが冷凍庫になってしまったからだ。

俺は元氣良くハイーというと回るのを止めた。うえーい。すげえー、世界がまわつとる。

「……ねえ、菊池。ちょっといい？」

回転からくるトリップに浸っていると我らが氷の女王（この子このあだ名を言つとすつごく怒るんですのよ奥様）こと、笹口かなえが突然口を開いた。

「うん？どうしたよ？」

ぐるぐる回る頭をおさえながら、笹口に対面する。

笹口は読みかけの本に栞をはせ、膝に置いた。

うーん、春の木漏れ日のなか本を読む笹口は筆舌に尽くしがたいほど綺麗だけど、

読んでいる本が『共産党宣言』ってOKなの？

そんなの読んでたら赤狩りされちゃうぞ、はーと。

「少し、聞きたいことがあるんだけど」

くだらんことを考えていたら、笹口はそう言った。

西口が口を開くとなるとかなり真剣な話なのだろう。俺は身佇まいを正した。

「菊池は……恋についてどう思う？」

「……ああ、鯉ね。うーん、爺ちゃんの家で池に鯉はいるけど、俺はあんまり好きじゃないなあ。ほら、あいつらやっぱり魚類じゃん。どちらかというと哺乳類の方が……」

「もう、そっちのコイじゃない！恋愛の方の恋よ、まともに答えて」

いやね、俺もそっちの恋だと思ったよ？

けどさ、西口がだよ、これまで数多の美男子共をかたっぱしからフツていって、仕舞いには、

「私、顔だけの男は嫌いな」

と言い放った西口が恋の話をすると思う？

私だって、西口ちゃんとコイバナしたかったんだヨ？

なのに西口ちゃんは私が好きな人の話をしようとする、

「腹が立つからそんな話しないで」

って言ったんだよ。

だから私は家に帰ってからお人形さんと一人さみしくコイバナしたんだよ？

もう、西口ちゃんのイジワル……

などと脳内女子高生の神埼狂歌ちゃん（只今命名）が独白していると、西口は痺れを切らしたみたいだ。

「で、どうなの。菊池は恋をしたいと思う？」

「うーん。したいと思うけど、残念ながら機会がないね」

「……好きな人とか、いないの？」

「特にいないよ。ほら俺、愛するより愛されたいタイプだから。俺を好きになつてくれた人と付き合いたいね」

愛するより愛されたいタイプだからは、俺なりに渾身のギャグだったのだが西口の琴線には触れなかったようだ。おかしいな？親戚の集まりでは爆笑だったんだが。

「ねえ、菊池！」

「うん？なんじゃらほい？」

西口は俺の目を見てそう言った。かなり真剣な様子だ。負けじと俺も西口の目を見つめ返す。

しかし、西口の次の言葉はない。見つめ続けていると、なぜか西口は顔を真っ赤にしている。柔雪と評される西口の肌がえもいわれぬ赤みを帯び、プリティグッドな美しさだ。

しかし急に赤くなったりして、風邪気味なのかね？

美人は真っ赤になっても美人ね、と女口調で考えていると西口は口を開いた。

「菊池の事が、好き」

「ほえ？」

隙？えー、俺ってそんなに隙ある？忍者に瞬殺されるレベル？などといったものようにふざけて答えようとしたが、できなかった。だって、西口が真っ赤な顔をして、その上涙目で、手をギュッと膝の上で握りしめてこちらを見てるんですよ？こんな西口は、今まで見たことが無い。

「……本気か？」

「本気つてなによ。私が菊池を好きになっちゃいけないの？」

普段と変わらない口調だが、いささか語勢が弱い。ところどころ声が震えている。

なにこの子。こんな西口初めてみた。

「あー、あのな西口。俺つてご存知のようにテキトー人間だ。

まあ基本的にはバカな事しか言わないし、見てのとおり顔も微妙だ。お前なら、もつといい男を捕まえられるんじゃないか……」

「バカ！！」

俺が自虐すると、西口は名誉毀損行為を行ってきた。

バカとはなんだ、バカとは。否定できないじゃないか。

「なんて言おうと私は菊池が好きなの！お願いだからへんな事言つて煙に巻いたりしないで、ちゃんと答えてよ！」

普段の西口からは見当もつかなくらいに必死に言う西口。

なに？クーデレって言うの？違うかもしれないけど、そんなのかまわない。ヤバイ。西口可愛すぎる。抱きしめたい。

そんなことを思っていると、ついっつかり西口をハグしてしまった。

もうさ、しょうがない。しょうがないよ。うん。神様も俺の行いを許してくれるよ。だって西口可愛すぎだもん。

ああもう駄目だな。こういうのは慣れてる奴にとつたらなんてことないんだろうけど、

俺からしたら無理。真っ赤になっちゃう。タコさんかよ。

二人とも真っ赤なまま、4、5分くらいハグりあっていると、俺の心臓がもう無理っスと悲鳴をあげた。

ぎこちなく離れると、西口は真っ赤なまま固まっている。

「あー、あのさ、西口」

「な、なに？」

「ふつつかものですが、どうぞよろしくお願いします」

「なんかそれじゃあ結婚するお嫁さんみたいだね」

西口は、真っ赤な顔のまま、微笑んでそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5222q/>

白波高校図書委員会活動記

2011年6月4日12時06分発行